會　務

第21卷第11號　昭和10年11月

役　員　會

第 9 回役員會（昭 10・10・23於帝國鐵道協會）

出席者：　青山會長，草間，平井兩副會長，池邊，內田小野，金森，佐藤，野口，藤井，吉川各常議員，野村，久保田各前會長

決議並に報告事項

1. 振興委員會第3部會委員を次の通り追加依囑せり。　內山賢君，緒形重吉君，松井達夫君，富樫凱一君，佐藤慶次君，本間仁君，佐藤輝雄君，須之內文雄君，奥田秋夫君，服部高基君，瀧山養君，瀨戸政章君。

2. 服部報公會へ明治以前日本土木史編纂出版に就き，1 年度に於て 2000 圓補助方申請せり。

3. 振興委員會第 2 部提案の土木學會振興策を速かに實施せんが爲め現行規則に基き次の如き組織にて之れを實施することに決定せり。

1. 庶務に主事 1 名を置き次の事項を擔當す。
講演，講習，映畫，座談，討論，見學旅行等の諸會合，
他學協會（外國をも含む）との連絡，國際會議關係，土木關係來朝者の斡旋，土木技術の宣傳紹介，會員の增加，地方委員並に會員相互間の連絡，會員の職業紹介，他部に屬せざる事項。

2. 法制部に部長 1 名及次長 1 名を置き次の事項を擔當す。
土木行政，土木教育の改革，法規の改正，土木技術者の任用範圍擴大。

3. 調査部に部長 1 名次長 1 名を置き次の事項を擔當す。
學術，災害，用語の調査，標準規格の制定，學術相談。

4. 會計に主計 1 名を置き次の事項を擔當す。
會計，事業費金の調達。

5. 編輯に編輯長 1 名を置き次の事項を擔當す。
會誌，諸出版物。

6. 東亞部　既設

7. 各部に若干の委員會を設置す。

8. 部長及次長の選任は理事一任とす。

4. 11月開催の講演會は東洋工業會議に出席せる本會代表の歸朝を待つて歡迎を兼ね東洋工業會議に於ける感想を聞く會を開催することとす。

5. 入退會の件

青木律郎君外28名を會員に阿部渠君外62名を准員に伊藤信男君外46名を學生員に入會を承認し，阿部護君外19名を准員より會員に青島弘君外 4 名を學生員より准員に轉格を承認せり。

編輯委員會

第 11 回編輯委員會（昭 10・11・4）

出席者：　藤井編輯長，岡田，龜田，川口，末森，成瀨，野口の各委員。

協　議　事　項

1. 第21卷第10號所載論說報告に對する討議依頼先を決定せり。

2. 第21卷第10號所載工事及災害寫眞，論說報告，彙報及び抄錄の謝禮を決定せり。

3. 第21卷第11號に下記寫眞及び原稿を追加せり。

工事寫眞：　東海道本線下淀川橋梁架設狀況，朝鮮慶尙南道赤布橋。

論說報告：　三角測量に於ける對數計算に就て（會，工　江藤禮）

討　　議：　連續性法則の平面剛矩形構解析への適用（會，石川時信），同上（署，會，工，重松愚）

彙　　報；　世界動力會議大堰堤國際委員會日本國內委員會近況（會，工博，神原信一郎）

抄　　錄：　鐵筋コンクリート量根の一例（…線に依る地盤壓力分布の觀測（糸川），波の洗掘防波堤基礎の設計（傍島），粘土中に於ける水（傍島），工事着手の Chicago 第 4 下水處理場…盛土の壓縮に關する問題（横田），新伯林 N… Bahn に就て（草間），2 主桁を有する桁橋の…メント（奥田），Great Lakes 燈臺の新型基礎…Calumet 港の鐵筒防波堤（吉藤），電氣的及び…地質探査法（糸川），Gibson の流量測定法の…（本間）。

4. 第21卷第12號登載論文を下記の通り決定…

論說報告；　淀川低水工事（會，工，山內喜之…鐵道線路に於ける線路の間隔及隧道の大きさに…各々備に就て（會，工，安倍邦衛）。

討　　議：　平齋線熊江橋梁の吊用式鋼…

て(會,工,船越春雄),同上(著,會,工,龍野繁太郎),

彙　報：最近本邦鐵道災害概況(昭和10年9月下旬)(鐵道省工務局保線課),中西省の水利と治水(會,工,清水本之助)。

抄　錄：動力學的地質調査法(糸川),銅鉱業の經濟的設計(糸川),掘鑿土砂の增減に關する實驗(糸川),Italyに於ける Molare 堰堤の決潰(三浦),Florida運河の起工(米屋),濾過材に無煙炭を用ふる場合の濾過持續(松見),英國 Parkeston の水陸連絡設備(北川),合衆國に於ける汚水處理能力(竹内),世界動力會議の大堰堤國際委員會(米屋)。

特許抄錄：15件及び登錄實用新案17件。

8. 土木賞牌關係,會誌の版改正,抄錄外國雜誌,工學會第3回大會論文提出者詮衡等に就き協議せり。

土木學會振興委員會

第2部會第7回委員會(昭10・10・10)

出席者：平山委員長,井上,内海,榧本,田中,高橋,三浦,山口,山下各委員,内田,藤井各常議員,柴原書記長,小野寺庶務主任。

協議事項

(1) 第6回委員會に於て決定し役員會に提出したる振興案に關し其後の經過に就き意見の交換をなし原案の通り實施せられんことを理事に要望することとせり。

第3部會第7回委員會(昭10・10・16)

出席者；野坂委員長,船越,太田尼,南保各委員,奥田秋夫君,小野寺庶務主任,五十嵐綱輯主任

協議事項

(1) 第2部會提案に依る常議員20名に增員の場合は第3部會に屬する會員中よりその3分の1名選出方希望すること。

(2) 准員に會員同樣の權限を與へること。

(3) 若き技術者の座談會を定常的に開催すること。

(4) 第3部會の委員に次の諸君を追加推薦すること。

内山實君,緒形重吉君,松井達夫君,宮崎凱一君,佐藤慶次君,本間仁君,佐藤輝雄君,須之内文雄君,奥田秋夫君,服部高景君,瀧山榮君,瀬戸政章君。

第3部會第8回委員會(昭10・10・29)

出席者：野坂委員長,内山,緒形,岡崎,千秋,本間,須之内,太田尼,奥田,南保,瀬戸各委員

協議事項

(1) 第3部會より役員會に提案せる振興策案を第3部會は全面的に之を支持することとし次の事項を補足することとす。

第3部會提案に依る常議員增加の場合は第3部會に屬する會員中より各部次長定員の半數以上を選任方希望すること。

第1部會第1回委員會(昭10・11・4)

出席者；那波,眞田,丹羽,鳥,前川,米元各委員,青山會長,草間,平井兩副會長,古川主事,佐藤主計,柴原書記長,小野寺庶務主任

振興委員會第1部會委員依囑の趣旨並に振興策等に就き青山會長より說明あり種々協議を重ね次回の會合を11月18日開催することに申合せり。

維新以前日本土木史編纂委員會

第32回委員會(昭10・10・23)

出席者：眞田副委員長,名井,仮井,江澤,那波,眞島,茂庭,小川,大河戸,牧各委員,望月,渡邊囑託。

本月の編纂事務その他の報告をなし次の事項を協議せり。

(1) 配本期日も切迫せるを以て編輯を急ぐこと。

日本工學會記事

昭和10年10月21日日本工業倶樂部に於て第3回工學會大會委員會講演委員第2回打合會を開催し次の事項を申合せり。

1. 大會規則及テクニカル・プログラム其他必要事項は12學會々誌に掲載し所屬會員に徹底せしめられたきこと。

2. 第3回工學大會の講演は從來の例と異り學會別とせず演題別に部會を構成することとなりたる結果同時期に開かるる各學會の年會,總會との連絡を如何にすべきやに付協議し次の通り決定せり。

(1) 12學會の中本大會と同時に總會を開く必要ある向は部會開會中(即4月5,6兩日の内)の時間を差繰り之を開くこと。

(2) 部會は差當り次の12部會を設くることゝし各部會に配當すべき論文は別冊テクニカルプログラム(以下單に別表と稱す)を基とするも各學會代表委員の協議に

より適宜變更するを妨げず。

1. 土木關係　別表3 の 一部及 4 に屬するもの

2.-4. 電氣關係　別表 7, 8, 9, 10 に屬するものにして其の細別は本部會關係の 3 學會に於て適宜に定む

5. 機械關係　別表 11, 12, 16, 19 に屬するもの

6. 火兵關係　別表 13 に屬するもの但し 12 中の一部を加ふることあるべし

7. 衛生關係　別表 14, 15 に屬するもの

8. 船舶航空關係　別表 17, 18 に屬するもの

9. 工學化學關係　別表 20 に屬するもの

10. 鑛業關係　別表 22の 一部

11. 鐵鋼及冶金關係　別表 22 の 一部

12. 建築關係　別表 3 の 一部

備考　別表 1, 2, 5, 6, 21, 23, 24 及 25 に該當する論文は應募狀況を見たる上にて部會を追加又は適當部會中に繰入ることゝす（別表は本誌第21卷第10號會告參照）。各部會の幹事は當該學會代表委員之に當るものとす。

3. 部會は東京帝國大學構内に於て開催するを原則とし各學會委員は前項分擔の部會に要する室數及各室收容人員並に希望設備を10月末日までに會場係井口委員（東京帝大船舶教室）まで申出づると同時に同所にて學會總會を開催し度き希望の學會は其の日取及收容人員を同委員に通知のこと。

若し學會の不得已都合に依り大學構内以外に於て部會開催の必要ある場合には會場の借用等は其の學會に於て爲すこと。

大學構内に室の借用不可能の場合には會場委員に於て他の適當の場所を選ぶことあるべし。

大學構内又は會場委員指定の場所に部會を開く場合の會場借用料は大會負擔とす，其の他の場合には學會負擔とす。

總會を大學構内に開く場合の費用に關しては大會幹事と學會との協議に依りて定む。

4. 4 日の總會には各學會の會長（不得已ば其の代理者）に所屬學會の關係工業の發達の趨勢につき講演を乞ふこと。

土木學會關西支部記事

○昭和10年10月 6 日關西支部秋季見學會を宇治川ライン遊コースにて次の通り開催せり。

伏見閘門操作見學の上，宇治川溯航，宇治川電氣志津川發電所及大峰發電所及堰堤を見學し宇治川ライン溯航觀賞し内務省南郷洗堰を見學，石山寺に參詣後大津に上陸解散す。

○第 6 回土木工學研究會講師招待晩餐會を次の通り開催す。

昭和10年10月22日主賓野溝講師
〃　〃　23日主賓堀岡講師
〃　〃　24日主賓松村講師

第23回視察旅行

視察場所；　第 1 號國道及 5 大橋，名古屋城，名古屋築港，名古屋下水處理場，名古屋驛高架線工事。

參加者：　東班27名，中央班41名，西班52名計120名。

日時行程：　昭和10年10月27日東班は午前 9 時東京驛發（鐵道事故の爲め豫定變更）浦郡に直行，西班は午前 8 時大阪を自動車にて出發第 1 號國道及鈴鹿峠，伊勢大橋，尾張大橋等を視察浦郡に着，中央班は浦郡に集合し常磐館に於て大合同懇親會を開き東班，西班及中央班の一部は同所に一泊翌 28 日浦郡を出發し熱田神宮に參拜の上參加者を 3 班に分ち名古屋城，名古屋築港，名古屋下水處理場，名古屋驛高架線工事を見學，東班は第 1 號國道を自動車にて視察し濱松驛より歸京解散し西班及中央班は名古屋驛にて解散せり。

その他の記事

○昭和10年10月17日膠濟鐵路管理局事務所長木村芳人君の來京を機會に東洋工業會議へ本會代表として出席せらるる會員松永工，山田隆二，加賀山學，宮本武之輔，久野重一郎の諸君を丸之内會館に招待し晩餐會を開き席上青山會長より東亞部設置に關しその趣意を説明して連絡援助方を依頼せり。出席者次の如し。

木村芳人君，松永工君，宮本武之輔君，青山會長，草間平井兩副會長，池邊，河原，佐藤，野口，藤井，古川，宮長各常議員，田邊，那波，名井，眞田各前會長，平山第 2 部委員長，柴原書記長，小野寺應務主任，五十嵐編輯主任。

○昭和10年10月17日丸之内會館に於て理事會を開き青山會長，草間，平井兩副會長，古川主事，藤井編輯長，眞田前會長，平山第 2 部振興委員長出席し次の事項を協議せり。

(1) 第 2 部提案に依る定款變更及臨時總會開催等に關

する件 (2) 服部報公會へ明治以前日本土木史編纂用原に對する補助請願の件 (3) 11月開催講演會の件 (4) 第3部委員追加依囑の件 (5) 10月の役員會開催日變更の件 (6) 工業大博覽會後援の件。

○昭和10年10月19日振興委員會第3部追加委員（役員會記事の諸君）を依囑せり。

○昭和10年10月21日服部報公會へ明治以前日本土木史編纂補助の申請をなせり。

○昭和10年10月29日前會長野村龍太郎君外10名前副會長丹羽鹿藏君外6名を振興委員會第1部委員に依囑せり。

○昭和10年10月29日土木學會誌第21卷第10號を發行成規の手續を了し10月30日全會員に配布せり。

○昭和10年10月21日まで に下記諸君を入會並に轉格の手續を了し名簿に登錄せり。

入會の部

會員

氏名	勤務先	氏名	勤務先	氏名	勤務先
青木　律郎君	哈爾濱特別市公署都市建設局	三枝　旭君	愛知縣土木部河川課	樋口　傳君	哈爾濱特別市公署都市建設局
伊藤　功君	岐阜縣總土木課	坂本　昇君	岩手縣總土木課	早野　三郎君	北海道廳室蘭土木事務所
飯田　一實君	愛知縣總土木部道路課	志田　順作君	愛知縣土木部道路課	星野津三郎君	哈爾濱特別市公署都市建設局
小野信太郎君	北海道總土木部河港課	柳原　重成君	北海道總室蘭土木事務所	三輪時三郎君	東京市水道局國新課
大崎　逸君	高知營林局	田島　治身君	愛知縣土木部道路課	向井　太作君	石川縣大聖寺用改修事務所
大場　一君	愛知縣土木部道路課	清　喜八郎君	同　上	柳井　三郎君	石川縣土木課
河村　英雄君	愛知縣土木部河川課	千葉　隆秀君	都市計畫山王地方委員會	渡部幸三郎君	都市計畫山王地方委員會
菊地　潤三君	横濱市土木局都市計畫課	中里　一德君	內務省土木局第二技術課	長谷川　清君	愛知縣名古屋土木工務事務所
久保田勝藏君	東京市水道局國新課	長久保信夫君	愛知縣土木部河川課		
小坂　忠一君	愛知縣土木部道路課	萩原　貞矢君	東京市土木局下水課		

准員

氏名	勤務先	氏名	勤務先	氏名	勤務先
阿部　巢君	愛知縣名古屋港務所	井由竹四郎君	東京市水道局國新課	江口　博一君	內務省矢作川改修事務所
安藤　賢一君	內務省矢作川改修事務所	捏谷　潔君	內務省木曾川上流改修事務所	近藤　光義君	北海道廳室蘭港務所
青池　秀吉君	靜岡縣靜岡土木出張所	鈴山　辰雄君	內務省鳴鳥港改修事務所	上風　慶福君	滿洲國理部工務課
淺井　光義君	靜岡縣沼津土木出張所	川上　健二君	哈爾濱特別市公署都市建設局	中村　代子君	滿鐵地方部工事課
淺野　忠雄君	東京市水道局國新課	草刈　三郎君	東京瓦斯小野田建設事務所	西田　朝二君	愛知縣安藝土木出張所
家入　惟保君	廣島南道土木課習州管區	栗原　正信君	朝鮮南海道總土木課	西村　義人君	石川縣港湾修築事務所
磯部　信彥君	愛知縣名古屋港務所	黑澤　三男君	石川縣鹽田土木出張所	野口　一郎君	名古屋市水道部
磯村崎五郎君	名古屋市水道部勤生工事々務所	小松　忠文君	石川縣小松土木出張所	橋本　秀三君	鐵道省工務局計畫課
吉田　保郎君	愛知縣名古屋港務所	後藤　宗夫君	內務省矢作川改修事務所	日隈　佐一君	哈爾濱特別市公署都市建設局
植松宗太郎君	鹽瓦電力會社土木部計畫課	近藤　仁君	山口縣新庄土木出張所	日比　正光君	內務省木曾川上流改修事務所
江澤金太郎君	哈爾濱特別市公署都市建設局	竹川　正二君	靜岡縣土木部道路課	廣住　宇矢君	滿鐵鴨綠建設事務所
江野澤逸一君	同　上	志村　文二君	岐阜縣土木課	藤田　正夫君	吉田鐵道局工務處工務科
遠藤　一雄君	山口縣日向川改修事務所	篠田　弘之君	石川縣土木課	本多　毅君	名古屋市土木部工務課
小澤　黃市君	名古屋市水道部	柴田　正二君	大阪市土木部南部出張所	松波　仁二君	水道協會大阪出張所
大野　悟君	日本製鐵八幡製鐵所	島崎　茂一君	石川縣土木課	三成　總君	北海道廳土木部土地改良課
大橋　健一君	日本瓦斯會社	杉本　芳一君	東京瓦斯小野田建設事務所	村田　忠夫君	吉田鐵道局工務處工務科
奥野與志雄君	奈良縣上市土木出張所	田中　良春君	横濱氣海軍建築部	八木喜代丸君	名古屋市水道部國新課
貝津　秀吉君	鐵道省廣地方事務所	瀧原　清治君	東京市水道局國新課	八銀　竹良君	東京市水道部國新課

山内 忠夫君 北海道廳函館復興事務局出張所
山口 芳厚君 哈爾濱特別市公署都市建設局
山崎 實君 株式會社間組
山本 春雄君 靜岡縣土木部河港課
吉池 晋君 東京市水道局機械課
渡邊 義直君 靜岡縣袋井土木出張所
飯沼 正男君 陸軍南道統帥事務所
泉 正雄君 内務所埼玉川改修事務所
吉田 節君 北海道室蘭土木事務所
服部 俊一君 愛知縣豐橋土木出張所

學生員

伊藤 信男君 仙臺高工
鵜飼 春一君 名古屋高工夜學部
濱田 丈吉君 日大工學部
大橋 正一君 金澤高工
太田 勝雄君 仙臺高工
上西 玄三君 〃
姜 球 遠君 京城高工
小杉 正男君 〃
佐藤 一郎君 日大工學部
佐藤十五郎君 北海道帝大
坂田 正登君 日大工學部
椎名 實君 京城高工
島井 格君 〃
庄司 一男君 日大工學部
角田 博一君 金澤高工
瀨古 新助君 日大工學部
大刀 顯君 日大工學部
俵 豐 男君 神戸高等專修學校
土橋 宜夫君 京都帝大
土屋 忠君 武藏高工
戸塚 敏雄君 日大工學部
中田 忠孝君 關西高工
中西 清雄君 京城高工
永井 文行君 武藏高工
林 三三夫君 〃
林 正 典君 京城高工
福島 公三君 仙臺高工
藤田 房雄君 京城高工
藤田 良櫻君 武藏高工
細川 嘉久君 〃
增田 正道君 日大工學部
松木 正三君 仙臺高工
松本 邦顯君 日大工學部
松原 磐夫君 仙臺高工
松本 正美君 日大工學部
水谷 政夫君 京城高工
宮本 正次君 日大工學部
明 在 昇君 武藏高工
森 清君 武藏高工
森山 清君 仙臺高工
山田 君保君 京城高工
山田 安綱君 名古屋高工
渡邊 正雄君 神戸高等專修學校
渡部武四郎君 東京高工
注連 清君 仙臺高工
由口 越郎君 〃
渕田 二郎君 金澤高工

韓國の部

會員

阿部 護君
安齋 榮君
安部 清實君
赤津 德君
秋草 勳君
秋本 健三君
雨森 常夫君
綾 鑑一君
荒井利一郎君
井島 春海君
井關 經雄君
井澗 玄三君
伊澤 貞吉君
伊藤 茂松君
伊原 貞敏君
伊藤 政一君
飯 敏夫君
飯田房太郎君
飯田 清太君
飯田前左衛門君
飯吉 清一君
石井 武一君
石原 宇吉君
石原藤次郎君
市川純一郎君
岩井 正一君
鵜飼 孝造君
上島 降次君
上ノ土 實君
吉部 鶴一君
江藤 智君
遠藤 秀友君
小野寺耕夫君
尾崎 久助君
大久保海吉君
大友清治郎君
大野 純君
大野 唯朝君
大山 照雄君
太田誠一郎君
太田尾廣治君
岡 實君
岡崎 逸三君
岡田政太郎君
岡田 親平君
奥田 秋夫君
奥村 舜造君
奥山 茂君
落合 林吉君
加藤本賢介君
香取 東司君
海淵義之助君
鍵山 健雄君
柿 德 市君
井岡 武雄君
井山 廣勝君
金津 尙一君
金山 直哉君
川田 卓三君
河津 彦一君
韓 仁 善君
菊地 謙平君
草刈 均君
草部 一來君
久喜隆太郎君
九里 良介君
桑田新太郎君
倉井 麟平君
小林 重一君
小牧 孟夫君
古賀 清藏君
近藤銑太郎君
近藤鉄之助君
今野 萬次君
佐々木主殷君
佐藤 寛政君
佐藤 輝雄君
佐藤 清見君
佐藤 愛君
佐藤 賢治君
佐藤 睦君
崔 景 烈君
齋藤 英雄君
齋藤 四郎君
境 隆 雄君
四野宮哲郎君
清水 義夫君
鹽谷 淳君
敷島 保君
重田 末藏君
篠原 武司君
須之内文雄君
鈴木藤三郎君
鈴木 寅吉君
住田 潔君
關 重 雄君
田中 鑑君
田中 幸吉君
田中 義展君
田沼 實君
田村 榮吉君
田村初代志君
高木 春雄君

高野 太郎君　高橋 種臣君　鷹田 正人君　竹内 一雄君　武井金二郎君　武田 義明君　楠 泰行君　千葉 秀雄君　近石 義巳君　堤 友之助君　鶴田 重盛君　恒田 敬三君　戸田 巌君　樋口 廣正君　常峰 遠君　中島 源次君

中西 伍良君　中山 清作君　中山 信喜君　中道 峰夫君　永井 幸雄君　永瀬 雄君　長坂 一彦君　長野 走彦君　南保 忠二君　西池 忠君　西岡 宏治君　西海 芳郎君　西松 康友君　西山 正平君　西島 尚義君　沼田 悟一君

野田 耕助君　野原 武孝君　野本 賢秀君　長谷川四郎君　橋本 太郎君　畑 一男君　服部 彰雄君　服部 高景君　花田 譲一君　早川 通男君　林 豹一郎君　林 清一郎君　樋口朝次郎君　平賀 榮治君　平松 親夫君　廣瀬孝六郎君

深城 久君　福田 實君　福西 正雄君　藤井 順治君　藤原嘉一郎君　藤芳 義男君　堀内 新吉君　堀田嘉四郎君　本間 仁君　米谷 信義君　前田 豐策君　松島 孝君　松本 憲司君　丸山 勘治君　三浦文次郎君　三宅第三郎君

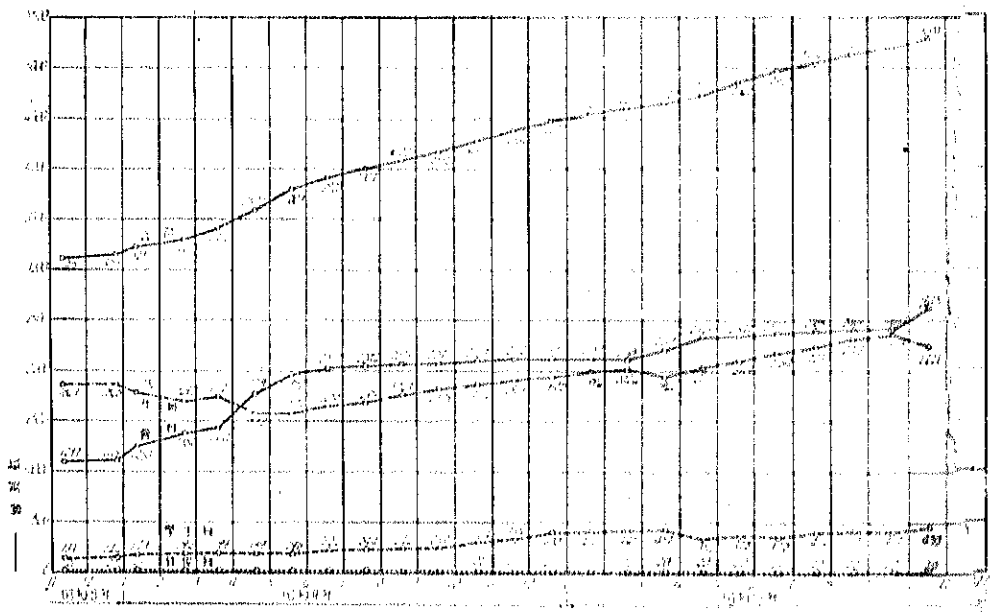
南田保太郎君　水野 高明君　宮入 司君　宮澤 太郎君　宮本 喜朝君　向井 治吉君　宗石 盛治君　目黒 清雄君　森 正英君　森川藤太郎君　森田 利吉君　矢野 貞雄君　山崎 長作君　山田 北男君　山田 軍治君　山田 [illegible]男君

山本 貞郎君　山本 廣治君　吉見 康男君　寄田 紀生君　和久 英雄君　和田 恒廣君　鶴崎 文雄君　渡部 隆志君　花園 逸策君　深谷 克海君　岡田 政吉君　高橋 光勝君　小野 [illegible]君

准員

寺島 弘君　石田 義男君　櫻本 與一君　平井 義明君　若桑 [illegible]君

會員移動一覽圖表



○圖書及び雜誌 (昭和10年10月中)

交換

鐵と鋼 第21年 第9號 日本鐵鋼協會　電氣學會雜誌 第55卷 第10册 第507號 電氣學會

機械學會誌 第38卷 第222號 機械學會
業務研究資料 第23卷 第29號 鐵道大臣官房研究所
港灣 第13卷 第10號 港灣協會
建築と社會 第18輯 第10號 日本建築協會
水道協會雜誌 第39號昭和10年10月 水道協會
土木試驗所報告 第31號昭和10年 第2册
內務省土木試驗所
都市問題 第21卷 第4號 東京市政調査會
道路の改良 第17卷 第10號 道路改良會
動力 昭和10年10月 日本動力協會
日本動力協會會報別册 昭和10年9月 日本動力協會
工業化學雜誌 第38編 第10册 第452號
工業化學會
工業化學雜誌歐文別册 第38編 第10册
工業化學會
旅順工科大學紀要 第8卷 第4-6號
旅順工科大學
工政 10年10月 工政會
日本建築士 第17卷 第4號 日本建築士會
造船協會雜纂 第363號 昭和10年10月
造船協會

寄贈

沖電氣時報 第3卷 第5號 沖電氣株式會社
G. S. News 第9卷 第9號 日本電氣株式會社
三菱電機 第11卷 第6號 三菱電機株式會社
Excavating Vol. 24 No. 9 三井物產機械部
材料文獻集 昭和9年度 材料研究會
土木建築雜誌 第14卷 第10號 シビル社
セメント界彙報 第331號 10月號
日立ポルトランドセメント同業會
工部彙報 第11卷 第10號 工部彙報社
工學 昭和10年 第254號 東京工學社
日立機械評論 昭和10年10月第22卷
日立評論社
ローマ字世界 昭和10年10月 日本ローマ字社
大阪港勢年報 昭和9年 大阪市役所港灣部
稻工會雜誌 昭和10年9月
早稻田高等工學校稻工會
工業現勢 第4卷 第10號 東京工業大學調査部
鑄物 第7卷 第10號 日本鑄物協會
電氣工作物風水害豫防調査委員會調査報告書
電氣協會關西支部
工部と諸員 仝 平山復二郎
山岳トンネル 仝 平山復二郎
電弧鎔接構造特に橋梁補强
木村秀敬・中原壽一郎・宮崎雪衛
鐵筋コンリクート速算法 原田碧
十周年記念大阪市域擴張史 大阪市役所
鐵筋コンクリート構法 原田碧
電氣工學年報 昭和10年版 電氣學會
セメント工業 第25卷 第307號 セメント工業社
技術日本 159號 10月 日本技術協會
工學院同窓會誌 第37卷 第11號 工學院同窓會
鐵筋コンクリート構造 第2卷 コロナ社
第三回特許局發明展覽會出品物略解 特許局

購入

Der Bauingenieur, September 1935, 16 Jahrgang, Heft 37-40.

Beton und Eisen, Oktober 1935, 34 Jahrgang, Heft 18-19.

Engineering News-Record, September 1935, vol. 115, No. 10-13.

Die Bautechnik, October 1935, 13 Jahrgang, Heft 40-43.

會　報

第21卷第11號　昭和10年11月

第23回視察見學旅行記事

昭和10年10月27,28日の兩日を卜して土木學會第23回秋季視察見學旅行が擧行された。視察見學の場所は東海道一號國道，熱田神宮並に名古屋附近土木工事であつたが，今回の試みは關東，關西，中央の會員合同の大見學旅行であるだけに，最初から非常な期待を以て當日が待たれてをり，特に關係各地に於ては日頃の敏腕の跡を全國會員各位に見せんものと非常な力瘤の入れ方であつた。

第1日の行程は關東方面會員の參加せる東班は午前9時東京驛を發し西下し，關西方面會員の參加せる西班は午前8時半大阪市廳會前より自動車にて東海道をドライブしつゝ東上し，中央班の待ち構へてをる愛知縣蒲郡に於て相會し此處で一大懇親會を開催せんとするものであつた。

27日朝は昨夜からの豪雨未だ止まず，折角の旅行に多少の不安を覺えたが，東班，西班何れも豫定通りのスタートを切つたのであつた。

東班小田原に立往生す

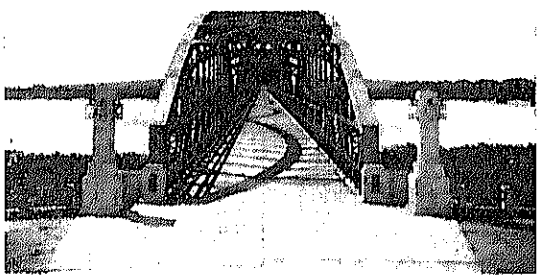
東班は約30名の會員の參加を見，午前9時發の燕號に乘車した。出發の當時は非常な雨であつたが，戸塚驛方面にて稍天氣明るくなり，この分では心配なきものと一同安心の吐息をついたのであつたが，列車が小田原驛にさしかゝるや突如停車してしまつた。早川・湯河原間に土砂崩壞し開通の見込みが立たないとの事であつた。又由北線も松田・下曾我間に於て之は出水の爲不通となり，由北線經由も不可能となつた。この報と前後して國府津・二宮間も不通の報が來り，自動車連絡の途も絶え，一行は全く進む事も退く事も出來なくなつた。折から猛然と雨も加つて無氣味な空氣の中に鎖されてしまつた。止むを得ず一行は列車内食堂にて飲物をあほりこの憂さを晴らしたのであつた。斯うして列車は約6時間停車し午後3時50分漸く開通を見た。土砂崩壞箇所は30kmの徐行を爲し，期待せざりし鐵道災害狀況を列車より視察する樣な事となつた。この爲東海道の視察は出來なくなり，そのまゝ一路蒲郡へ向ふ事に豫定を變更した。途中先般浪害のあつた蒲原・由比間を通過したが，先程來の天候の爲波浪特に高く，浪害當時の狀況を偲び自然力の偉大さを感じたのであつた。

5時40分靜岡驛にて列車を乘換へ，こゝにて靜岡市長及び西靜岡縣土木部長代理の出迎へを受け澤山の果物，ビール等を贈られた。濱松驛に着するや，又々濱松市役所より果物を贈られ，退屈した旅に甘露を得たかの如き感を懷いたのであつた。斯くして豫定より遙かに遲れ9時蒲郡に到着した。

西班東海道をドライブ東上す

西班は參加會員約60名，午前8時半大阪市廳會前に集合し，9時自動車に分乘して京阪國道，京津國道を一路蒲郡へと疾驅した。大津より瀬田川橋草津を經て鈴鹿峠に差しかゝり，此處で暫し車を停めて昼食を爲し更に車を驅つて四日市に向ひ，四日市港を車中より見學，伊勢大橋にて下車して揖斐川，長良川合流點に架かる長橋を見學した。更に壓搾空氣潛函工法を以て橋脚基礎を施工し昭和8年10月竣工せる尾張大橋（第1

第1圖　尾張大橋

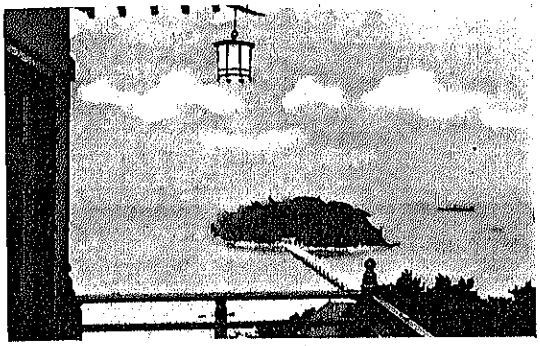


圖）を見學して，名古屋を過ぎ午後6時蒲郡常磐館に到着した。

愛知縣廳の御好意に依る大懇親會開催

西班が常磐館に到着した時は既に日も暮れかゝり，一同本日の大行程の疲れを休めつゝ中央班會員と種々懇談し，或は蒲郡名勝竹島辨天（第2圖）に參詣して，東班の到着を待つた。然るに東班の到着遲延する旨の電報あり，止むを得ず大廣間に參集して愛知縣の御好意に依る大懇親會のプログラムを切つた。由日愛知縣土木部長，其の他の挨拶も簡單に，直ちに30有餘人の美妓を相手に酒宴は開始された。舞樂では蒲郡美人連の蒲郡浄瑠璃が始まり，その美しさに盃の數は進んだ。

第 2 圖　蒲郡竹島



東班は遅れて 9 時蒲郡驛着，直ちに常磐館に入つたが，時既に宴たけなは，西班の猛者は舞臺にある土木學會の文字入りの提灯をもぎとつて，土木學會の萬歳を叫ぶ。いかにも和氣藹々たる大懇親會である。暫くして青山會長起立，柴原書記長の發聲で土木學會の萬歳を叫んで10時45分懇親會を閉ぢ，一同風光明媚な蒲郡に一夜を明かした。

熱田神宮參拜

第2日目の行程は先づ，11月 1 日遷座祭の行はせられる熱田神宮に參拜するのである。昨日の天候はどこへやら絶好の日和にて海景の展がる所巨船二つ，三つ，靜かに浮ぶ。この蒲郡を後に 9 時熱田驛着名古屋市の方々の出迎を受け自動車にて大社熱田神宮に向ふ。 9 時 15 分遷宮前の新な白木の香も床しい熱田神宮に着し，御祓を受け草間副會長一行を代表して御神を捧げ，參拜を終る（第 3 圖）。

第 3 圖　熱田神宮

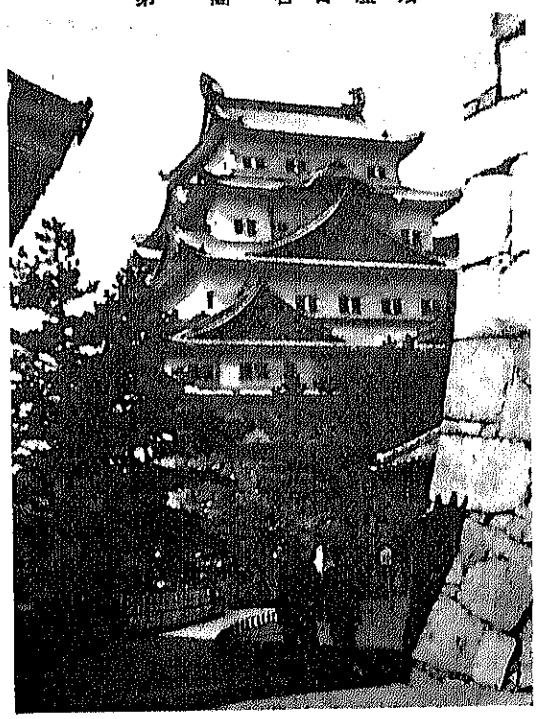
之より一行を 3 班に分ち，第 1 班は名古屋城，第 2 班は名古屋港，第 3 班は名古屋下水處理場の見學に向つた。

名古屋城見學

第 1 班は天下の名城として人口に膾炙した名古屋城見學の爲め遷座祭の奉祝氣分横溢せる名古屋市の街上ドライブの後 9 時45分外苑正門着，仰げば折からの快晴に天守閣の雄姿は天空に聳立し，頂の金鯱は燦然として瞼を壓する計り，四圍の風光又人をして低徊佇立せしむる中を敷砂利の音も爽かに高雅なる建物御殿に到着，此の御殿は桃山時代及び江戸時代初期に於ける最も華麗なる書院造にして此の内上洛殿は明治，大正，今上天皇御三代の御座所になり，狩野探幽の筆になる有名な繪や左甚五郎の作なりと傳ふ一枚板兩面彫の欄間等種々なる國寶物等名古屋市係員の御説明に感を深うしつゝ天守閣に向ふ（第 4 圖）。

天守閣は加藤清正が一手に之を引請造營したものにして，其の規模の壯大なる寔能く當時の技術を以つてかゝる大構造物を成し遂げたるかに驚かされる，一層より順次當時其の儘の防備裝置の施されたる階段を登るにつれ其の胎内の各室は御藏の間と稱し物置に充てられたものとか，又御金藏と稱する軍用金の貯藏庫も設けられ又厠井戸迄掘られ之を黄金水と稱し重用されたものだとの事，階を重ぬるに從つて視界は展け最上層五層より四所を瞰下すれば一望海闊市内並に遠近の青巒指呼の中に見え展望極めて雄大なるものがあつた。

第 4 圖　名古屋城



五層一巡の後同所退出不明の門より樹木鬱蒼たる外苑に出で懐古の念に打たれ乍ら一行自動車にて名古屋市廳舍に向つた。

築造は慶長年間加藤清正御城惣大將役として北國，西國20諸侯(知行總石高6 387 400石，之を現時に換算すれば約1億圓位)に命じ人工 25 585 800 人を要して築かしめたものにして，五層閣上に燦として輝く金鯱は高さ南方(雌)8.3尺，北方(雄)9.2尺，胴廻南方6.5尺，北方6.85尺，木材を身とし鉛及銅に金を張り合せ作りたるものにして之に使用した金の量は慶長小判にて 17 975 兩(時價約 750 000 圓位)との事，之を德川義直(尾州公)の居城として300年間を過し，明治維新後陸軍の所管に移り，天守閣を衞兵舍となした，明治20年宮内省移管となり名古屋離宮と改稱され天皇，皇后兩陛下屢々御駐泊あらせらる，昭和5年名古屋市に御下賜となつた，總坪數 43 063 坪，御殿，天守閣，各櫓門等の建造物は悉く國寶に指定せられ，區域一帶は史蹟に指定となり，適時の條件範圍内に於て一般の拜觀に供し，永久保存される事となつた。

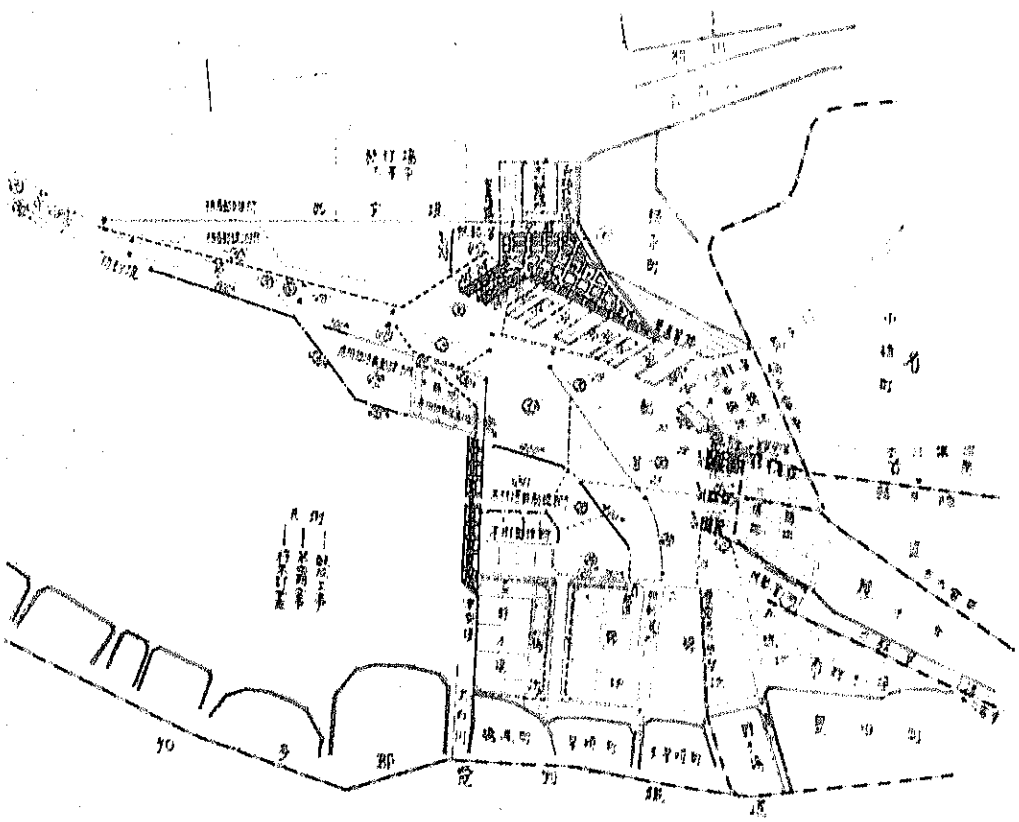
名古屋港見學

熱田神宮に參拜後，第3班20數名は神宮前より一行と別れ6臺の自動車に分乘，疾驅すること15分にして9時45分名古屋港務所着，直ちに廳舍に案内され，田中主事，田所技師等より同港の沿革第1期に事以來現在迄に將來に對する計畫の概要に就き說明あり，終りて一同ランチに乘船，港内各施設の視察を爲した。(第5圖參照) 10時50分視察を終り上陸し，市廳舍に向つた。

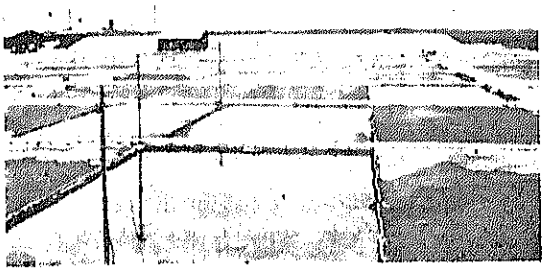
名古屋市下水處理場見學

名古屋市の下水は堀留，熱田，露橋，傳馬町の各下水處理場で處分せられその上澄水を運河に放流し，その汚泥は大部分は天白汚泥處理場に壓送せられて，こゝで砂濾乾燥及び消化槽により處分されてゐるが，第3班一行は池田水道部長の案内で先づ天白汚泥處現場を見學し，次に堀留處現場を見學した。

第 5 圖　名古屋港修築計畫平面圖



第 6 圖　天日汚泥處理場



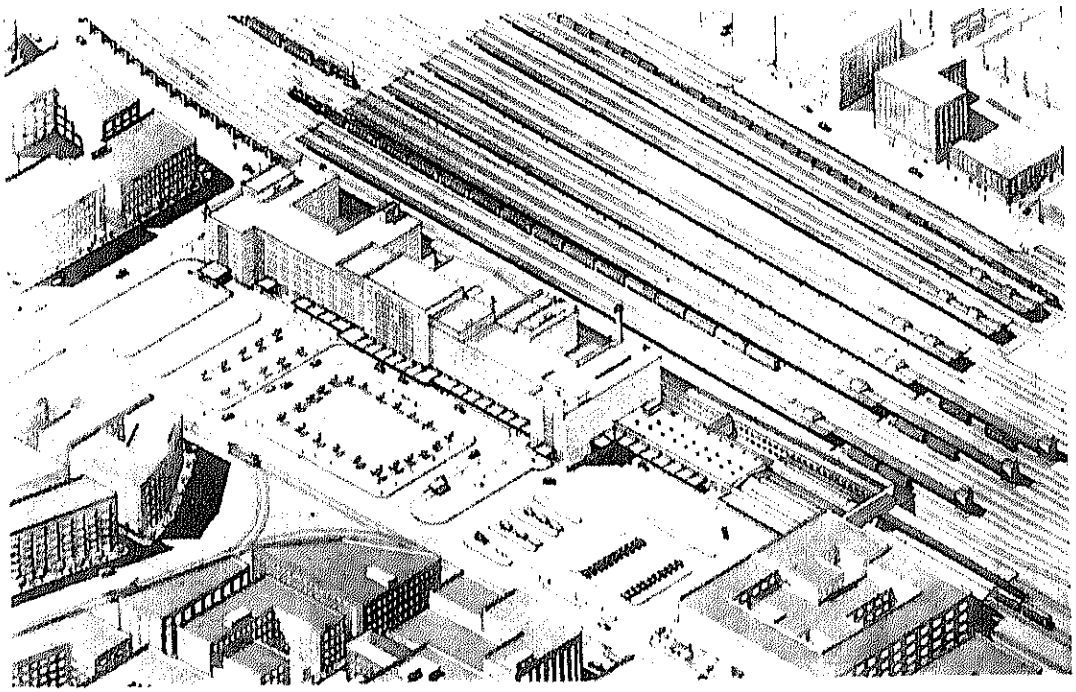
一行名古屋市長の招待を受く

名古屋城，名古屋港，名古屋下水處理場を見學して來た各班は正午名古屋市廳舍に於て合流し，市長招待の午餐會に臨む。食後神田助役市長を代理して歡迎の辭を述べられ，之れに對して草間副會長全員を代表して謝辭を述べられた。午後1時50分市廳舍玄關前に出で此處で一同記念の撮影を爲した。(第 9 圖)

名古屋驛改良工事見學

記念撮影終了後，一行は市廳舍を後に名古屋驛改良工事の見學に出かけた。先づ驛工事詰所にて中原驛一郎君より工事の說明を聽き，工事場一周の爲自動車に

第 7 圖　名古屋驛完成豫想圖



天日汚泥處理場では前述の 4 下水處理場より輸送せられて來る活性及び沈渡汚泥を處理して，之から活性汚泥肥料を生產してをるので，我國では最も進步した處理方法を行つてをるものである。この肥料は 1 瓩 12 圓に賣れ，餌の肥料價から云ふと 20 圓にも相當するものであるとの事である。肥料生產高は昭和 9 年度に於て約 800 瓩 の由である。

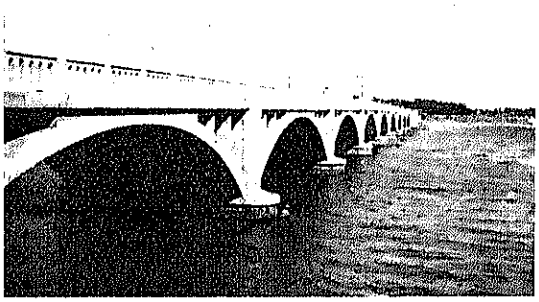
次に堀留 下水處理場は 曝氣式促通汚泥法に依るもので，名古屋市中心部の 下水を處理し 1 日の處分能力は 23 萬石である。

分乘し，由田技師の案內にて完成せる貨物驛，工事中の客車車場及び驛ホームの高架線工事を逐一見學した。

名古屋驛改良計畫は大正14年測量を開始し，昭和 2 年の現在案を以て昭和 4 年貨物驛第 1 期工事を完了し，現在高架式旅客驛構內の コンクリート工を終つた。昭和 2 年完成の曉は第 7 圖に見る樣な堂々たる大名古屋驛が現出するのである。

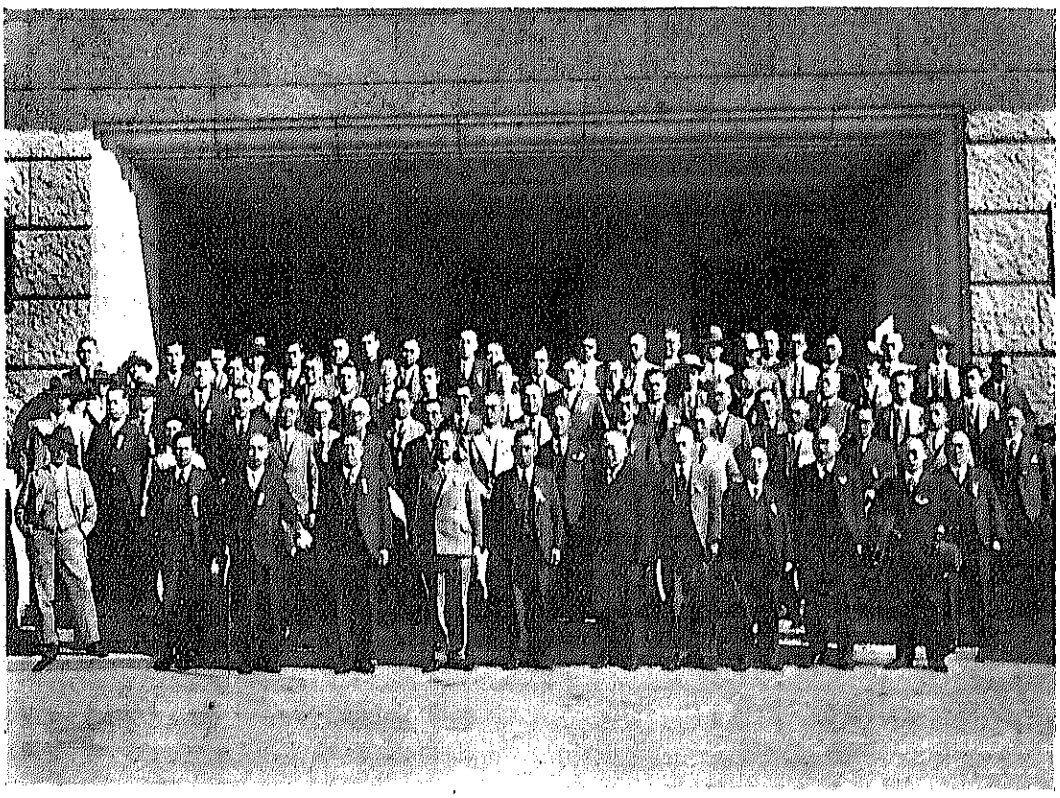
之を以て 2 日間に亙る視察見學旅行を終り，思ひ思ひに東と西に袂を分つたのである。

第 8 圖　中 濱 名 橋



ふが如き紺碧の空と纖じ麗かなドライブ日和となる。遲れまじと先導車を追ふ一團，學會名を表示せし一行は，地方民の注視を浴びつゝ局部的に點在せる鋪裝道或は昔の名殘東海道筋の松並木を縫ふて疾走すること暫し，3時50分愛知，靜岡縣界に到り，此處にて愛知縣側の好意による車より靜岡縣側30人乘バスに乘り換へる。さほどまでの上り路とも思はざりしに，山頂に到りたるものと見え，このへんより下り坂路となり，眼界展け，白波躍る海邊に沿ふて走り，4時20分濱名湖に到る。再び福田濱松市土木課長の出迎を受け，一同下車湖畔の料亭丸文に案内され湖上の秋景を賞しつ

第 9 圖　名古屋市廳舍前の記念撮影



東班歸路一號國道を視察

前日の雨で東班一行は一號國道の視察が出來なかつたので，希望者をつのり，歸路國道視察を行ふ事となつた。依つて希望者16名は豫定を更へ名古屋市廳舍にて一行と分れ5臺の自動車に分乘して，ドライブの途に上つた。

昨日の悪天候は全く忘られたるものの樣に，一天拭

ゝ，茶菓酒肴の馳走を受け少憩後出發，濱名湖に架る長橋中濱名橋（第 8 圖）を渡り5時30分濱松驛着5時30分發東京行終列車に乘車し，11時半，東京驛に着し，一同旅の疲れをねぎらひたがひ解散した。斯くして今回の視察旅行は大成功裡に終了したが，茲に上記關係各位の御盡力と御好意に對し厚く感謝の意を表する次第である。

視察見學旅行參加者氏名 (順序不同)

東 班

青木信夫君　中山忠三郎君
青山士君　平尾昇君
伊藤重敬君　廣瀨孝六郎君
磯海國吉君　福田武雄君
上野有芳君　吉川淳三君
大內勇君　細野芳彥君
鬼海治三郎君　前橋俊一君
北澤惇夫君　吉田耕一君
草間儀君　山木新次郎君
櫻井季男君　櫻井哲三君
高良末綱君　大川一郎君
中倉專一郎君　鬼丸忠男君
中野澤君　中西幸男君

西 班

荒井文太郎君　佐藤信七君
安藤四良君　坂本助太郎君
伊藤孝治君　鮫島午吉君
磯野博君　清本忠雄君
內山新之助君　瀧江武君
遠藤正己君　島重治君
遠藤瑾君　島崎孝彥君
大井清一君　鈴木義一君
大村四郎君　杉谷茂君
金丸正春君　菊地芳君
木村喬君　重松愚君
北村祐彌君　伊藤清君
敬禮寺信三君　阿部清紀君
小山猛三君　田淵壽郎君
後藤佐彥君　田村義正君
近藤泰彥君　高西敬義君
佐藤勝君　高橋邊夫君
武田富吉君　山崎利雄君
橘善雄君　山崎俊君
鐵晴司君　吉藤幸朔君
中井二郎君　坂井則夫君
原田類助君　永井專三君
林千秋君　諸井英一君
福留並喜君　工藤久夫君
藤野豐次君　金吉久次君
松田健作君　千田正重君
見山剛君

中 央 班

阿部巢君　鈴木滅一君
秋山清君　善如寺秀太郎君
飯田一賀君　田島治身君
池田篤三郎君　原田正則君
石下朝重君　舘喜八郎君
石田昌平君　都々木春美君
磯部信彥君　麵田廣正君
磯村崎五郎君　富田正道君
岩田保郎君　長尾金次君
上井兼吉君　長久保信夫君
大崎虎三君　西尾辰吉君
大場一君　畑生德郎君
筧斌治君　花井又太郎君
金津尙一君　藤野義男君
河村英雄君　三上昭君
北澤忠男君　山極二郎君
小坂忠一君　山口十一郎君
佐竹光三君　磯部光雄君
三枝旭君　服部保一君
志田順作君　長島敬君
杉戸清君

會　　告

明治以前日本土木史送本遲延に就て

○本學會發刊の明治以前日本土木史は本年 12 月末日までに送本の豫定にて豫約募集を致しましたが編輯の都合で出版が遲れます，何卒悪からず御了承を願ひます。

尙送本日確定の上は更めて御通知を致します。

御住所不明會員に就て御願ひ

下記諸君は轉居先の御通知がないため，會誌の配布を始め，その他の諸通信が出來ませんのは，誠に遺憾であります，どうぞ知人の方は御手數恐れ入りますが，御本人に御注意下さるか，本會にその住所又は勤務先を御知らせ願ひます。

會　員

荒川參太郎君　稻葉彌吉君　木村貫一郎君　小林源次君　藤增能君　張惟和君
陳發榛君　富永芳太郎君　廣瀨宗直君　藤原譲君　丸林氣郎君　村田清君
安西榮太郎君　山本弘君　山本保之助君

准　員

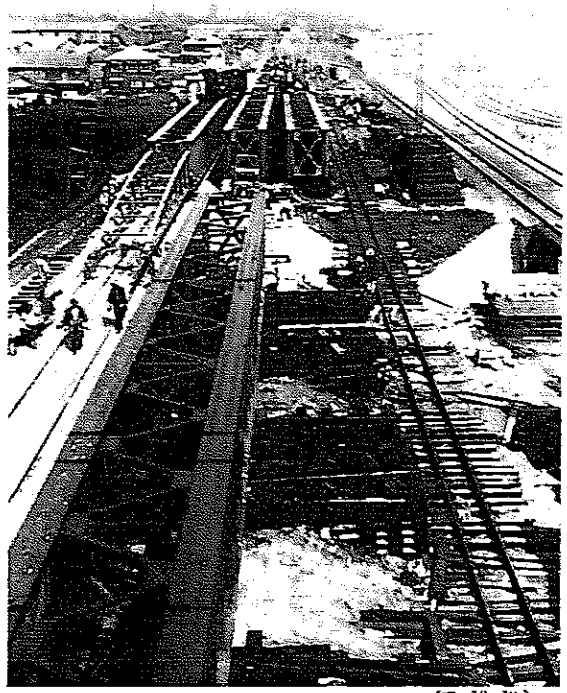
和泉高嚴君　池田乙次郎君（舊名三郎）　池田角太郎君　石原三郎君　岩田正平君　袁汝鋤君
小川彌一郎君　緒方政雄君　大森鶴吉君　柿崎景久君　片岡巍君　城內清太君
菊池三吉君　栗田忠治君　小林義雄君　佐藤與吉君　齋藤賢策君　末永政雄君
關佳夫君　曾我進君　田代岩平君　田所要吉君　田中武次君　多田安三郎君
高瀨太吉君　高橋理三郎君　武田惣一郎君　谷征一郎君　徐三善君　坪井基君
中野順太郎君　難波壽一君　丹羽賢象君　西野清民君　野口金太君　萩原官六君
濱崎朝四郎君　平本源太郎君　藤村禮士君　福島保君（舊名高尾）　船橋貞一君　萬斯選君
水原譽文君　宮田肇君　村田勝次君　本橋二郎君　矢野鷹雄君　山尾茂夫君
山田政次郎君　横田清治君　吉金亮三君　吉田二億君　吉丸義君　吉見胤隆君
劉作檀君

土木工學論文抄錄頒布に就て

○昭和 9 年 10 月本會に於て發刊致しました土木工學論文抄錄の殘部があります，御希望の方は御申出で下さい，3 圓 50 錢で頒布致します。

東海道本線下淀川橋梁橋桁架設工事

1. 鈑桁架設準備中

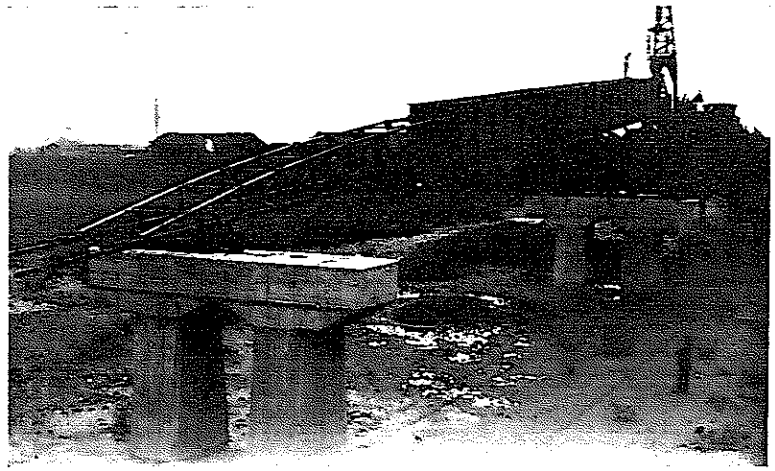


(昭. 10. 10.)

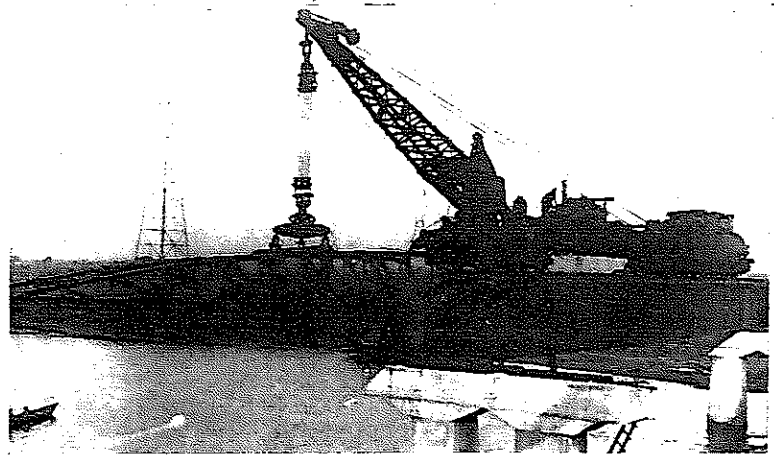
本橋梁は大阪塚本間下淀川に架せらるゝもので徑間16.0 m 1 連, 25.5 m 1 連, 32.0 m 22 連, 28.5 m 1 連, 全部上路鋼鈑桁である.

32.0 m の鋼鈑桁は從來の手延機或ひは採重車のみでは架設出來ないので兩者を併用して架設することに成功した, 目下架設工事中である.

2. 手延機が橋脚に卸された所

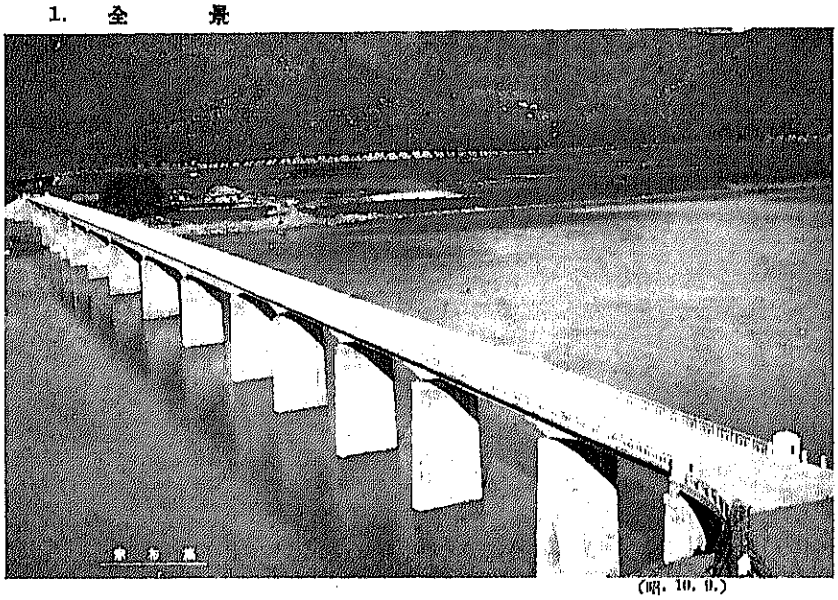


3. 架設した鈑桁より手延機を採重車にて取外中

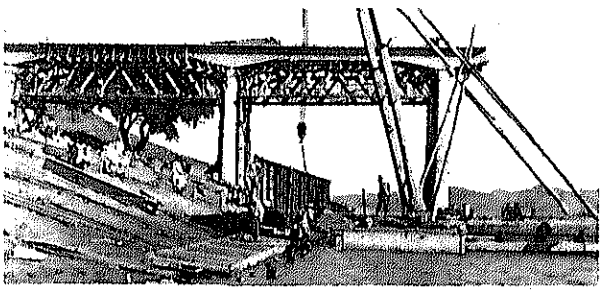


朝鮮慶尙南道赤布橋

1. 全　　景



(昭. 10. 9.)



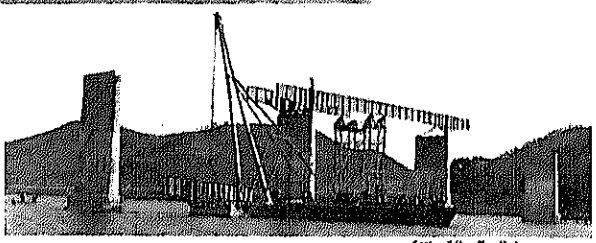
2. 橋體架設狀況

(昭. 10. 4. 20.)

3. 鋼鈑桁架設狀況

　　挫徑間 28.0 m

　　吊徑間 32.4 m



(昭. 10. 5. 3.)

名　　稱：赤布橋（2 等道路居昌，昌寧線）

位　　置：朝鮮慶尙南道 昌寧郡梨房面 陝川郡書溪面 界洛東江に架設

橋梁型式：
- 中央部　ゲルバー式鋼鈑桁橋　5 徑間　140.4 m
- 兩側部　ゲルバー式 T 型コンクリート橋　10 徑間　173.7 m

全橋長：314.1 m　幅員 6.0 m（有效 5.5 m）

橋面勾配：縱斷勾配 1/300 拋物線，橫斷勾配 1/50 拋物線

基　　礎：鐵筋コンクリート楕圓形井筒，(短徑 3.15 m，長徑 6.5 m，長平均 18 m) 12 基

主要材料：
- 鋼鈑桁 186 t，鑄鋼沓 4.4 t，現場鉸鋲 14 390 本
- 鐵　筋　上部構造 83.6 t，下部構造 53.9 t，
- セメント　〃　6 027 袋　〃　24 856 袋

施工期間：
- 起工　昭和 8 年 10 月
- 竣工　昭和 10 年 9 月

總工費：210 000 圓

會　告

圖書御寄贈の御願ひ

本會は本會所有の圖書雜誌を整理し，圖書室を設備致しましたが，現在所有の圖書は未だ充分とは云へませんから，會員の著書其の他圖書雜誌は大小に拘らず學會宛御寄贈下さる樣御願ひ致します。

圖書室及び娯樂室御利用に就て

本會所有の圖書及び雜誌は本會圖書室に備付けてありますから，下記時間内御隨意に御閲覧下さい。尙娯樂室には碁，將棋盤を備付けてありますから御利用を御願ひ致します。

自9月1日至12月31日
自1月1日至7月20日　自午前9時至午後8時，

自7月21日
至8月31日　及土曜日自午前9時至午後4時，

但し　日曜日及び祭日休。

徽章佩用に就て

本會の徽章は一般會員の方々に必ず佩用して頂く事に致してをります。講演會，見學會其の他事務所御利用には徽章佩用を必要としますから，未だ佩用せられない方は至急御申出で下さい。

1. 徽章の寸法　徑 14 mm
2. 品種　銀地金文字浮出し
3. 種類　略樣服用と背廣服用の別あり
4. 實費　金 50 錢（郵送の場合は外に書留郵便料 1 個に付金 13 錢を要す）

（實物大）

寄稿に關する注意

1. 用　紙：成るべく本會の原稿用紙を使用され度し。原稿用紙は御請求次第御送り致します。
2. 頁　數：頁數は本會の原稿用紙 180 枚（本會誌 30 頁）以内とされ度し。若し前記頁數を超過する場合は分割をお願いすることがあります。
3. 文　體：文體は式辭的口語體とす。本文に重要な關係のない前置，挨拶等は省く事。この方針に基き適當に字句の修略，短縮を行ふことがありますから御了承あり度し。
4. 符　號：横書とし，假名は平假名，數字は算用數字，ローマ字は日本式ローマ字を使用され度し。數字は特に明瞭に認められ度し。例へば n と u，u と v，r と v，α と γ，d と δ，その他 C と c，K と k，O と o 等所字と小字とを判然たらしむる事。
5. 算式標準：(1) 本文文字列に挿入する算式は
   例へば a/b と書き $\frac{a}{b}$ を避け，$(a+b)/(c+d)$ と書き $\frac{a+b}{c+d}$ を避けること。
   (2) 數　　字
   數字は 3 桁毎に間隔をあける事 名數は次の如く書き括弧内の如く書くを避けること。例へば
   35 錢（三十五錢），13.50 圓（十三圓伍十六錢），1～4 時間（一時間乃至四時間），88 320 ㌧（八萬八千三百二十六噸），1935 年 1 月 1 日（千九百三十五年一月一日），m（米），m^3（立方米），kg（瓩），l（立），8尺4 尺（八尺二尺四寸）
6. 用　語：應用力學及コンクリート用語は工學會決定用語を使用され度し（應用力學用語は本誌第 10 卷第 5 號，コンクリート用語は第 20 卷第 6 號廣告參照）。
   コンクリートは片假名で記し漢字を用ひざること。
7. 圖　表：(1) 圖表には圖表題を記すこと。
   (2) 複雜なる表の如きは成るべくグラフにて示す事。
   (3) 圖面はその儘縮寫し得る樣にトレーシング・ペーパー，オイル・ペーパー，トレーシング・クロース等とすること。
   (4) 圖表は凡て墨色を用ひインキ類或は彩色を施さざる事。
   (5) 方眼紙は青罫のものを用ひ（黄色，赤色の罫は使用せざる事）縦横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置くこと。
   (6) 圖表の文字，數字は特に大きく書かれ度し（縮寫の標準は 1/3～1/5 程度とし縮寫後の文字の大きさを約 3mm 程度となる樣され度し）。
   (7) 圖表類は製版の都合上かなり汚損するものと豫め御含み下され度し。
8. 寫　眞：寫眞は特に明瞭なるものを送られ度し。
9. 其　他：(1) 論說報告は邦文に限る。
   (2) 論說報告には必ず冒頭に英文表題及び邦文要旨並に著者の職名及び勤務所名を添附され度し。
   附　記：(1) 論說報告，雜報，抄錄及び工事寫眞にして掲載せる分には謝礼を呈します。
   (2) 講演，論說報告の各關に掲載の分には拔刷 30 部を寄稿者に贈呈致します。尚 30 部以上御希望の向には豫め御通知ある場合に限り實費にて御要求に應じます。

既刊會誌殘部內譯

(＊ は殘部有るものを示す)

卷＼號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	金額(1部)(円)
5	＊	＊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.00
6	—	—	—	—	—	＊	—	—	—	—	—	—	1.00
7	—	＊	＊	＊	—	—	—	—	—	—	—	—	1.50
8	＊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.00
9	＊	＊	＊	—	＊	＊	—	—	—	—	—	—	2.00
10	—	＊	＊	＊	＊	＊	—	—	—	—	—	—	2.00
11	—	＊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.00
12	—	＊	＊	—	＊	＊	—	—	—	—	—	—	2.00
13	—	＊	＊	—	—	＊	—	—	—	—	—	—	2.00
14	＊	＊	＊	＊	＊	＊	—	—	—	—	—	—	2.00
15	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	1.00
16	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	1.00
17	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	—	—	＊	＊	1.00
18	—	—	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	—	1.00
19	＊	＊	＊	—	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	1.00
20	＊	＊	＊	＊	—	—	＊	＊	—	—	—		1.00
21	—	—	＊	＊	＊	—	＊	—	＊	＊			1.00

第 20 卷第 12 號（創立 20 周年記念號）…… 1.50
第 21 卷第 7 號（會誌索引付）…… 1.30
東京市內外交通に關する調査書…… 3.00
震害調査報告書(1,2,3)……18.00
應用力學聯合大會講演集…… 1.00
鐵筋コンクリート標準示方書…… 0.50
同　上　解　說 …… 1.00
土木工學節文抄錄…… 3.50
土木學會誌索引(第 1 卷第 1 號—第 20 卷第 12 號)…… 0.50

上記殘部會誌御希望の場合は所要金額を振替口座東京 16828 番に拂込用紙通信欄にその旨記入請求せられたし。

廣告料

普通廣告	1回 1頁	35圓	1回半頁	20圓
指定廣告	裏表紙3面對面及廣告初頁		1回1頁	40圓
	裏表紙3面		1回1頁	70圓
	色アート		1回1頁	60圓

○指定廣告は凡て1箇年繼續申込のものに限り取扱ふものとす

○會員自身の廣告に對しては總て上記料金の割引とす

○同一廣告の連續掲載申込に對しては 1 年 4 回以上 1 割引とす

○廣告に寫眞版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす

會員轉居轉勤の場合の注意

會員の御轉居又は御轉勤の場合は即時明細に御通知下され度し。

會費納付に付き注意

會費	會員種格	會費年額	第1期分 (1月～6月)	第2期分 (7月～12月)
	會員	金12圓	金6圓	金6圓
	准員	金9圓	金4.50圓	金4.50圓
	學生員	金6圓	金3圓	金3圓

新入會者は月割計算とす。

納期 第1期分：3月　第2期分：9月

納付方法 集金郵便を差向けます（旅行等にて御不在の場合も拂込に支障なき樣御配慮下さい）。

振替郵便御利用の場合は振替口座東京 16828 番へ願ひます。

朝鮮滿洲の一部等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末迄爲替その他の方法に依り御送金相成たし。

會費一時納付の御豫定の場合は豫め御通知下されたし。

未納の場合 集金郵便に對し故なく支拂を拒絶し又はその他の方法により御送金なき場合は會費滯納者として遺憾ながら定款第2章第14條第1項に依り會誌の配布を停止せられます。

會誌未着の場合の注意

會誌は毎月25日に發行し遅なく配布致しますから，未着の場合には一應本會に御照會下さい。發行後數ヶ月經過しての照會は時に殘部皆無となり配布不可能の場合があります。

DOBOKU-GAKKAI-SI.

(JOURNAL OF THE CIVIL ENGINEERING SOCIETY.)

VOL. XXI, NO. 11, NOVEMBER, 1935.

CONTENTS.

Page

Proceedings of the Society. 95

Papers.

On the Discharge Control of the Lake Biwa from the Standpoint of Water-utilization.
By Kinosuke, Yamanouti, C. E., Member. 1577

Report on the Construction of the Highway, Hsinking to Kirin in Manchoukuo.
By Masabumi Yoneda, C. E., Member 1611

On the stability of the Block Construction.
By Hisao, Kudô, C. E., Member. 1627

On the Logarithmic Calculations in Triangulation.
By Rei Etô, C. E., Member. 1637

Discussions. 1645

Notes on Matters of Interest. 1649

Abstracts of Selected Articles. 1657

Patent News. 1713

OFFICE

No. 6, 3-TYÔME, MARUNOUTI, KÔZIMATI-KU, TÔKYÔ, JAPAN.